

かけがえない村～山古志の農的暮らし

プロジェクト2 研究員
農業生物学研究室 主宰
明峯 哲夫

本稿は2009年4月11日、新潟県長岡市山古志地区で行われた山古志住民会議・東洋大学合同の集会での報告を基に、その後の調査も踏まえ新たに書き下ろしたものである。

第1章 流域を生きる

(1) 信濃の流れ

甲武信ヶ岳。標高2475メートルのこの山は、甲州（山梨県）、武州（埼玉県）、信州（長野県）三県境の接点に聳える。この山の頂に降り注ぐ雨水。その運命はどの斜面を下るかで大きく変わる。東斜面（埼玉県側）を下る雨水は荒川水系に紛れ込み、173キロの旅の後東京湾に辿り付く。もし南斜面（山梨県側）を下れば、笛吹川を経て富士川に合流し、駿河湾で128キロの旅を終える。いずれにしても旅はさして長くなく、終着点は太平洋だ。しかしもし北、あるいは西斜面（長野県側）を下ることになると、その前途には思いがけない長旅が待っている。

長野県側に集まった雨水は千曲川となる。その流れは多くの盆地を縫うように進む。その流れる様はまさに“千曲”の名に相応しい。佐久、小諸。北上した流れはここで上信国境の山岳地帯に行く手を阻まれ、西に蛇行する。そして上田、長野に至る。ここで飛騨山地から流れ出た犀川が合流。流れはここから大きく北東に向きを変える。飯山を過ぎるとまもなく新潟県との県境。ここからこの川は名を変える。信濃川。本来は“越後川”とでも呼ぶべき川にこの名が付けられた

のは、越後の人々の源流信濃への敬意からだったろうか。こうして信濃の流れは十日町盆地を越え、いよいよ小千谷。ようやく山岳地帯を抜け出し平坦な地に至る。新潟平野だ。関東平野に次ぐ日本第二の広さを誇る沖積平野。川幅は広がり、流速は一気に落ちる。長岡、三条、そして新潟。総延長367キロ。日本最長の大河信濃川はここで海に注ぐ。終着点は日本海である。

温暖だった縄文時代。現在の日本列島の海沿いの低地は海だった。この縄文海進のピークは今から6000年程前。新潟平野も当時は日本海の一部。ここは沖合を北上する対馬海流に運ばれた砂で外海から隔てられた、遠浅の入り江だった。山岳地帯を削るように流れてきた信濃川はここで流速を落とし、大量の土砂を置き去りにする。こうして入り江は徐々に埋め立てられ、湿地化していった。“ラグーン”つまり“潟”の出現である。新潟とは“新しい潟”。今でも新潟平野には多くの潟が残る。この平野は蒲原（かんばら）平野とも呼ばれる。つまりここは蒲（がま）の原だった。

現在、日本列島の水田の多くは川縁の平野部に分布する。しかし水田は平野部で始まった訳ではない。それは山間部の狭い川筋（谷戸）で始まった。川筋の小さな湿地が最古の水田である。川の下流部はたえず氾濫が続き、そもそも人は住めなかった。縄文の時代から、人は小高い丘の縁、つまり見下ろすと川があり、

後背部に森林が広がっている台地の縁に集落を作ってきた。台地上の一広がり畑、そして山間の傾斜地での焼畑が、当時の人々の耕作活動の主な舞台だった。時代が下り江戸期に入る。大掛かりな土木技術が発達する。全国で平野部の川筋の整理が行われ、いたずらに氾濫が起きないようになった。ここに規模の大きな水田が拓かれる。「新田開発」である。こうして多くの人々が台地から平野に降りてくる。

越後平野で本格的な干拓が始まったのも江戸中期に入ってからだ^(注1)。1730年、時の新発田藩により信濃川に合流していた阿賀野川に松ヶ崎水路が開削される。さらに江戸後期の1820年、長岡藩と村上藩により新川の開削が行われた。そして時代は下り、1922年国家的大事業として信濃川の大河津分水路が完成する。こうして信濃川、阿賀野川、二つの河川によりもたらされる大量の水(外水)の外洋への排水処理は一段落する。

大正末期、阿賀野川河口近くの木崎村(旧豊栄市・現新潟市北区)で起きた小作争議を描いた『木崎農民小学校の人びと』^(注2)には、江戸期の干拓民たちの苦闘が描写されている。干拓地では毎年くりかえされる洪水に備え、集落全体を高い堤防で囲んだ。輪中である。入植者たちはかつての故郷から木の苗と土を運び、湿原に植え、泥田には山の黒土を運び入れたという。しかしこれらの輪中も海拔0メートルに近く、しかも日本海の干満の差が小さいため、人びとは輪中内部に滞る水(内水)に苦しんだ。内水処理に希望がもたらされたのは、遠く時代は下り1892年、この地に最初の排水用ポンプが設置された時だ。以後ポンプの普及により、湛水田は湿田、湿田は半湿田となった。しかしこの平野全域の水田が乾田化されたのは、実に戦後のことである。1946年に始まる農地改革により耕作者自身がポンプ稼働の主体者となった。また土地改良法制定(1949年)により、国営、県営の灌漑排水事業が始まる。さらに耕地整理が行われ、どの区画も水路に面するようになった。低湿で洪水常習地であった蒲原が、日本有数の穀倉地帯に変身したのは、

何百年にも及ぶ人々の悪戦苦闘の結果だったのである。

(2) 緑のダム

流域面積日本3位、年間流量日本1位。流域は有数の豪雪地帯で、春から初夏にかけ大量の融雪水が流れ込み、年間を通じて渇水期がない。それ程豊かな水の流れだからこそ信濃川は、下流域に広大な沖積平野、ひいては肥沃な穀倉地帯を生み出した。しかし一方で過剰なその水の流れは、流域各所でたえず水害をもたらした。戦後信濃川水系には治水、治山、利水などの目的で多くのダムが建設される。しかし上流から流れてくる土砂によりダム湖はいずれ埋まる。ダムは永続性がないのである。しかし永続性のあるダムがある。それは森林だ。

樹木や草もない裸の山肌。そこに雨が降り注ぐ。雨水は強く土を叩きながらその表面を抉るように流れ、急速に沢筋に流れ込む。降雨と共に川の流量は一気に上がる。激しい降雨は、山肌の土砂崩壊を引き起こす。

一方鬱蒼とした森林で覆われた山肌。降り注ぐ雨水が撃つのは土ではなく、梢の葉だ。ついで雨水は細枝、太枝へと順次下方へ伝わり、ついには一本の太い幹へと集められ、静かにその根元に流下する。樹々の下は落葉、落枝の分解物が分厚く堆積している。流下した雨水は、このふかふかした海綿状の堆積層に次々と吸い込まれていく。雨水はゆっくりと地下深くに浸透し、やがてそこを流れる水脈に合流する。時が経ち、地下水脈はとある沢筋で湧き出す。小さな沢筋は流下しながら互いに合流し合い、やがてその流れは川に注ぎ入る。樹々の葉に降り注いだ雨水が、こうして川に流れ込むには、何年、時として何十年の時間が必要だ。ゆっくりとした、しかも絶えることのない水の流れ。それを演出するものこそ“ダム”の名に相応しい。それが森林である。

山肌の傾斜地を舞台にした農耕は、絶えず土壌流失の危険と隣り合わせている。森林を伐採し、そこに作物を栽培するのは、山肌を裸にすることに近い。その

点で伝統的な焼畑耕作は優れた農法である。一定の面積の森林に火を入れる。その灰を肥料として作物を作付ける。燃やされた樹々の根はまだしっかりと土を捉えている。2、3年の耕作の後そこは放棄され、森林に戻される。森林が復活した何十年か後、再びそこは火入れされる。焼畑耕作はこのように、“緑のダム”森林と人間の農耕活動とを共存させるものだ。信濃川流域の山間地でもかつてはこのような焼畑耕作が盛んに行われていた。

傾斜地を階段状の畑地として造成すれば、土壌流失は防げる。しかしここではダムの機能は期待できない。ところがその階段状の畑地を湛水して利用すれば、そこは再びダムの機能が復活する。棚田である。平坦にした一広がり畑地。その周囲に畦を巡らす。そこに山肌から湧出する水を導き、イネを栽培する。棚田に降り注ぐ雨水は、一枚また一枚と下方の田を周遊しつつ流れ下る。棚田の枚数が多い程、全体の面積が広い程、雨水が下方の川に流れ込む時間を稼ぐことができる。

江戸期に始まる新田開発は、進歩した土木技術と共に、経済力と大量の人員を動員する強力な権力が必要だった。しかし山間地における棚田の造成は、直接耕作に携わる人が、鋤一本で可能だった。こうして古く山間部の谷戸で始まった水田耕作は、未だ中央集権が確立しない中世期に既に山肌での棚田で普及していった。

長野盆地の南西、千曲市姥捨。千曲川を見下ろすこの姥捨伝説の地に「千枚田」がある。この棚田が文献に現れるのは1578年、その起源は中世にまで遡るといふ^(注3)。この“田毎の月”をはじめ、千曲川、信濃川流域の山肌には数多の棚田が連なる。

2001年、当時の田中康夫長野県知事は「脱ダム宣言」を発した。「数百億円を投じて建設されるコンクリートのダムは、看過し得ぬ負荷を地球環境へと与えてしまう。・・・長期的な視点に立てば、日本の背骨に位置し、数多の水源を要する長野県に於いては出来る限り、コンクリートのダムを造るべきではない。・・・」^(注4)。それ以後長野県内でのダム建設は

止まった。

(3) 闇が光を守る

標高2000メートル級の山々が連なる上越国境。新潟と首都圏とはこの高い壁で大きく隔てられている。自然の水の流れはこの壁を穿つことはできない。この壁に細く長い“風穴”を開けたのは人間の文明の力だった。1931年、茂倉岳(標高1978メートル)直下を貫通する清水トンネルが完成。東京と新潟が鉄路で直線的に繋がった^(注5)。1982年上越新幹線が開通。東京、新潟間はわずか2時間10分に短縮される。一方1954年、茂倉岳の西方三国山(標高1636メートル)に三国トンネルが開通する。東京と新潟が車道で直接繋がったのだ。現在の国道17号線(東京―新潟間)が全通するのは1964年。ついで1985年関越自動車道(東京―新潟間)開通。東京、新潟間は自動車でも日帰り可能となった。遠く隔てられていた新潟と首都圏。それを繋ぐ人の流れ、物の流れは、こうして現在では日常化した。

首都東京への一極集中。ヒト、モノ、カネ、そして情報。そのすべてがこの都に集まる。その都市文明の“きらびやかな”あり様が列島中に喧伝される。東京の一人勝ち。地方の限りなき衰退。“壁”を貫く“細く長い穴”は人々に何をもたらしたのだろうか。しかもそれが山間地に暮らす人々と、巨大な都とを繋ぐものだとしたら。山間地のくらしと巨大な都市文明の落差。山間地に暮らす人々はそれに戸惑い、恐れ、焦り、妬み、そして自信を喪失していく。もしこのように自分を失っていくばかりであるならば、“壁”を貫く“細く長い穴”のむこうの世界との関係は“程々に”しておくべきであったろうか。人々の意識もまた巨大な都に吸い取られてきたのだ。

源流、上流、中流、下流。同じ川の流域でも、地域によりその風土や歴史は異なる。しかしそれぞれの風土や歴史は、川の流れに沿って連続的に繋がっている。どの地域も、どんな人間も、流域の中では孤立して存

在することはありえない。この風土や歴史の連続性は人々に、一体感や、安心・平穏な感覚をもたらす。一方で、流域全体の平安を維持するため、各地域に期待される役割は、その流域での位置により違ってくる。川の水の清濁、多寡は上流の地域のあり方により決まり、その影響は下流に及ぶ。一方で下流の地域は流れ至る水の恵みを活かす責任が生ずる。川の流れは各地域に、自らが果たすべき役割を教えてくれる。水の流れが地域に、そしてそこに暮らす人に与えるものは深く、貴い。今人々が自らの地域のあり様を問うとするならば、その視線は“流域”にこそ注がれなければならないはずだ。

長岡市山古志地区。信濃川下流域右岸の山間地。急峻な山肌はブナの原生林が覆う。そして緩やかな斜面には小さな棚田が連なる。村に降る雨は、ブナ林の地下深く染み込み、数多の棚田を周遊する。無数の沢筋に湧き出た水は、何本かの小さな川となり、村から流れ出す。その流れはまもなく本流信濃に合流する。この小さな村も“緑のダム”の一翼を担っている。こうして無数の“山古志”が信濃川を守っている。そして列島全体では、無数の“山古志”が無数の“信濃川”を守っている。

地球観測衛星の画像がある。宇宙から見た深夜の日本列島。海岸線はほぼ途切れることなく光が続く。日本列島の形がくっきりと浮かび上がる。一際強い光を放っているのは首都圏。関東平野はほぼ全域が輝いている。そして名古屋、阪神の両大都市圏も眩い。新潟平野は小さな光の集団を作っている。一方列島の脊梁部分は深い闇が覆う。しかしこの闇の中にも人のくらしはある。彼らのくらしの場に灯る光はあまりにも儂なく、地上700キロ上空に浮かぶ衛星のレンズには届かない。その闇の中にひそやかに暮らす人々が山を守り、棚田を耕すことで、光の世界は守られている。闇が光を守る。その逆ではない。もし闇の中のそのかすかな光が消え、そこが真の闇に閉ざされれば、眩いばかりの都の光もまた消えてしまう。

第2章 山を生きる

(1) 山にいつづける知恵

人にとって自然は、時として荒々しい。強風、豪雨、酷暑、極寒……。これらの自然の猛威から逃れ、“平穏で快適な”暮らしを得るべく人が作り上げたのが、“都市”という人工カプセルである。このカプセルの中では、土はビルやアスファルトで覆われ、水の流れはコンクリートの枠に閉じ込められ、原生する森林は切り倒され、生き物の猛々しい生の表出もない。このカプセルは工業的な技術により建設され、維持されている。だからカプセルの中で暮らす一人ひとりの人間にとっては、身の回りの環境は与えられたもので、自らの力で働きかけ、保守できるものではない。

都市が目指すのは自然の“制圧”である。そこには自然を“活用”する視点はない。“制圧”された自然に人に恵みを与える余力はない。こうしてカプセルは自然の恵みを得ることができない。人々が必要な食糧やエネルギーは、カプセルの外から運び込まれる。都市とは人が自然から身を隠す単なる空間ではない。それは外の世界からモノ、ヒト、カネを奪い続ける“権力機構”である。都市に生きる人のくらしは、この“権力機構”から与えられるものだ。与えられ続ける人間からは、環境に主体的にはたらきかけ、そこから生きる術を得る知恵が失われていく。同時に“平穏で快適な”恒常的環境に閉じ込められた人々からは、変動する環境との交流により喚起される心身のしなやかさもまた奪われていく。

山間の村。そこにもカプセルは設えられている。しかしそれはささやかなものだ。村は生（なま）の自然に直接包囲されている。人々はこの自然と向き合い生きる。小さなカプセルしか持たぬ村は、他の世界から“奪える”ものは僅かだ。村は自ら必要とするものは“自活”しなければならない。自活は自然の恵みを得ることによりはじめて成り立つ。生の自然に包囲された山

の人々にとって、自然はまさに驚異である。しかし同時に自然は恵みを与えてくれる祝福すべき存在でもある。自然の力を活用するには、自然を制圧してはならない。自然を上手に“手なずける”ことが必要である。“手なずける”とは自分の思い通りにすることだ。しかしあくまでも相手の自主性を尊重しながらという点で、“制圧”とは異なる。つまり手なずけるとは“手入れをする”ということである。森（樹）の手入れ、土（畑・棚田）の手入れ、水（小川・水路）の手入れ、道の手入れ・・・。

2004年10月23日夕刻の中越大地震。自然の地形を無視して直線的に造成された舗装道路は、各所で寸断された。自然を“制圧”しようという人間の技術の限界がここにも露呈する。その脇を自然の地形に沿ってくねくねと続く旧道は、被害がほとんどなかった。もともと山古志の地質は脆く、斜面は徐々に崩れ続けている。村人たちはその崩れ落ちた場所に次々と棚田を造成してきた。“崩れる”という自然の“自主性”を損ねることなく、一方で米を作るという人間の思いを遂げていく。自然を上手に手なずける人々の知恵がここにある。震災後、村々の斜面は分厚いコンクリートで塗り固められた。それは震災による傷口の応急処置の跡を見るようで心を痛ませるが、なおも自然を“制圧”しようという人間の愚かしさをも見せ付けられる思いがする^(注6)。

自然を上手に手なずける技術は、広い意味で“農的技術”と言ってよい。この農的技術なしに村は成り立たない。村人誰もがその技術を持つ必要は必ずしもないが、誰かが（なるべく多くの人が）その技術を体現する必要がある。そしてその技術は若い世代に確かに引き継がなければならない。

（2）農の仕事

草を刈り、動物を育てる。落ち葉をさらい、畑を肥やし、作物を育てる。こうして人は生きる糧を得る。山間地の農の営みは何よりも人々の暮らしを支えるも

のだ。農とは自給のノウハウである。しかし農的営みは“稼ぎ”仕事にもなりうる。自家消費の余剰を売り、現金を稼ぐ。稼ぐためには、生産規模の拡大が必要だし、技術はある程度の効率を求められ、生産物は何がしかの商品性が問われる。こうして農は農業となる。しかしこの稼ぎ仕事はあくまでも、暮らしを支える仕事（自給）により支えられている。自給の延長に稼ぎ仕事がある。

都市に暮らす人々からは暮らしを支える仕事が奪われている。生きる糧はすべて“権力機構”が与えてくれる。ただしその生きる糧を与えられる交換条件として、カネが必要である。人々はそのカネを求めて稼ぎ仕事に汗を流す。稼ぎ仕事にありつけない人々は生きる術を失い、文字通り路頭にさ迷う。自らの暮らしを支える仕事を奪われているという点では、都市に暮らす誰もがそもそも根無し草である^(注7)。

村の自給を支える農の仕組みを考えてみよう^(注8)。

① 多品目少量生産

畑の作付けの基本は「多品目少量生産」である。米、豆、芋、野菜類、果樹。食生活を支えるできるだけ多種類の作物を育てる。山古志のような豪雪地帯では、ムギやタネなど冬作物の栽培は困難である。それだけに雪解けから冬の到来まで、畑を十分に活かし切る工夫が必要になる。かつて山古志の村ではどの家も味噌を作っていた。「昔はどこでも大豆畑、小豆畑があった。何俵と出荷もしていた。しかし最近はムジナ（タヌキ）の害が増えて、豆ができなくなった」^(注9)。手前味噌を復活するにはダイズ栽培の復活が必要だ。そのためには野生動物対策が課題になる。

② 農産加工

味噌づくりをはじめ「農産加工」は、村の生活に欠かすことができない。雪国では野菜の漬物づくりは、長い冬を過ごすための大切な習慣だ。体菜（タイナ）など葉菜類の塩漬、キュウリ、ナスなど果菜類の酢漬（ピクルス）、特産野菜であるカグラナンバン（トウガラシの仲間）を甘味噌と合えた神楽南蛮。これら

は現在も山古志の主婦たちの手で精力的に作られている。

③ 直販所

収穫物、加工品の余剰は村内で「直販」される。2009年8月、私たちは山古志村内の直販所（08年山古志支所の調べでは合計14店）のいくつかを視察した。どの店も、帰村直後の08年は村を訪ねるツアー客が多かったが、09年に入ると客足が減ったという。村内の直販所は大きく二つのタイプに分類できる。「余ったものを売る」店と、「売るために作ったものを売る」店である。前者は「売る」という感覚があまりなく、むしろ客との交流を楽しんでいる。そもそも村人たちにとれば「野菜は売り物ではない」^(注9)。一方後者は「売る」ことに、より戦略的である。主婦たちの共同耕作グループ「畑の学校」^(注8)もその一つだ。彼女たちはこの年も、前年と同様45aの農地で野菜を栽培している^(注10)。カグラナンバンは300株、タイナは7a作付けた。これらは二人のメンバーがそれぞれ自宅に建設した加工場で加工され、直販、もしくは農協へ出荷される。現在彼女たちの直販店は週末に営業される。しかし夏野菜などは毎日収穫する。彼女たちの課題は常時営業できる場の確保である。しかしメンバーが少なく（5人）毎日店番はできない。客が集まるかどうかの不安もある。現在余剰分はメンバー各自が買い取り、消費するか、加工に回すかしている。

直販所のもつ“サロン性”は山古志の財産である。それぞれの店がそれぞれの個性を発揮して客をもてなす。“200円”の買い物に“200円分”のおまけをつけるような。そんなもてなしに客人は魅了される。今全国で活況を呈している共同直販所は山古志に似つかわしくない。零細で少数の生産者、多くの客を期待できそうもない地理的条件。規模の大きな直販所はそもそも山古志では成り立たない。長岡市には山古志地区に「震災メモリアル資料館（仮称）」を建設する構想がある。そんな施設ができれば、そこに直販コーナーを併設することができるかもしれない^(注11)。

④ 循環型農法

持続的で安定した農業生産には、農地への堆肥施用は欠かせない。健全な土作りは病虫害に強い作物を育てる^(注12)。化学肥料や合成農薬の使用は土を殺し、農産物の質を劣化させる。家畜を飼い、その糞尿を堆肥にし畑地に入れる。自然の循環を生かした農法は、かつて山古志では当たり前のように行われていた。循環型農法の要は家畜である。牛、山羊、羊などの反芻動物は草を、また豚は農場残渣、台所くずなどを資源化してくれる。どの家の庭先にも再び家畜が復活する日が待望される。

熊本県水俣市。今もお水俣病で苦しみ続けるこの町は、「環境モデル都市づくり」を推進している。ゴミの22種類の分別など、「環境・健康・福祉」に対する市民や自治体の意識は高い。また多くの農民（漁民でもある）たちは有機栽培による農産物直販に熱心に取り組んでいる。反農薬生産者連合（現・企業組合エコネット はんのうれん）の生産者たちは、甘夏の有機栽培に既に30年の実績がある。彼等は「被害者が加害者にはならない」と、農薬への依存を拒否し続けてきた。水俣病は不知火海へ垂れ流された水銀が原因だった。海に放出された水銀は食物連鎖の果て人間の身体に濃縮し、人々を難病に陥れた。それは自然への畏れを知らぬ一企業の仕業であった。山古志を襲い人々を苦しめたのは、大地震という自然の猛威だった。今「防災」のシンボルとなりつつある山古志。「防災」とは自然を畏れること。棚田が連なる「防災」の村には、自然循環型の農業こそ似つかわしい。

⑤ 集落営農／共同耕作

「今年は順調すぎる」。山古志・池谷地区生産組合^(注8)。組合結成2年目の09年秋、米の収穫を終えリーダーの一人は満足そうにこう言った^(注13)。この年の春から、共同作業の要である機械のオペレーターにA氏が参加。3人体制になった。61歳のA氏はグループ“最若手”。次代のリーダーを期待されている。彼はこの春まで長岡市内で小さな会社を経営していたが、退職。「第二の人生は農業」と、あらためて米づくりに励む^(注14)。

「組合ができてみんな気持ちに余裕ができた」と現リーダー。「女たちに任せていた野菜づくりにじじたちも取り組み始めたし、水田作業もこまめになった。畦草は鎌で刈るようになり、除草剤が少なくなった」。

震災によりA氏の自宅は全壊。今は長岡市内で暮らす。「山に帰るつもりでいた。でも同じ世代がいなくなるという子どもの意見を尊重せざるをえなかった」。それでも山の棚田に毎日通う。彼は通勤農業者だ。無事だった車庫が今は農作業用の物置。「休憩は日陰。トイレは現場工事の作業場のを借りる」。集落から離れ、村の共同作業には声がかからなくなった。「それはせつない」。しかし彼は営農組合には加わった。組合の寄り合いには必ず参加し、そこでは大いに期待がかかる。通勤農業者を支える仕組みとしても、生産組合の存在は頼もしい。池谷地区ではまもなく地区センターが完成する。そこではトイレや休憩室ができ、通勤農業者も利用できるという。

高齢化。後継者不在。耕作主体の減少。耕作地を維持するには、耕作者同士が助け合う仕組みが不可欠だ。「畑の学校」のような主婦による共同耕作。そして集落営農。「私たちも60代が主体。いつまで続けられるか。私たちに若手が加わるのもいいけれど、それよりも私たちのようなグループが村内にたくさんできればいい」と、「畑の学校」のメンバーの一人は言う。池谷営農組合のリーダーはこう告げてくれた。「将来は放棄された棚田の管理を組合で請負いたい。組合はあと10年位は維持できるかな」。

(3) 耕す空間の未来

『山古志村史・通史』(注15)。この分厚い書物をひもといてみよう。546ページ。ここに記されている数字には驚かされる。それは1938年(昭和13年)当時の「山古志郷耕作面積別農家戸数」である。総耕作戸数1387戸、総耕作面積1018町歩(約1009ヘクタール)(注16)。震災前2000年の農林業センサスによれば山古志地区の耕地面積は165

ヘクタールだった。現在の村の佇まいを眺めて、1000ヘクタールを越す“広大な”農地が一体どこにあったのだろうかと考え込んでしまう。山の斜面の上の上まで利用していたのだろう。『村史』の別のページを調べてみる。1940年(昭和15年)の米の作付け面積は村全体で534.8町歩(約530ヘクタール)、収穫高は9052石(約1357トン)とある(注17)。つまり当時の農地の半分程は棚田で、米を作っていた。因みに帰村後の08年、山古志地区の水稲の作付け面積は110ヘクタール程だった(注18)。70年前、村ではその5倍近い面積に米が栽培されていたのだ。では戦前、残る概ね500ヘクタールの畑では何を作っていたのだろうか。恐らくその多くは桑畑だったと想像される。当時村では養蚕が盛んだった。棚田を耕すには牛の力を借りられる。しかし急峻な斜面での労働は鋤一本だったろうか。先人たちの労働の厳しさがあらためて偲ばれる。

こうして耕す空間は減りつづけてきた。これからのシナリオは三つある。農を活性化し再び耕す面積を上向かせるのか、現状を維持させるのか、このまま衰退に向かうのか、である。

一人ひとりの人生のありかたは、その人が決める。しかしその人生は「村」により支えられている。その「村」のあり方は、人々の合議で決められる。一人ひとりが「村」のあり方を決め、「村」により一人ひとりの生き方が決まる。この仕組みが「自治」である。自治が健全である限り、「村」の未来や、一人ひとりの未来は、単なる“いきがかり”ではなく、主体的に「選択」したものとなる。

仮設暮らしが続いていた07年7月、「山古志住民会議」が発足した。「行政ばかりに頼るのではなく、住民の主体的な発想や思い、願いを復旧・復興に活かしていきたい」(注19)との住民の思いがこもる。既に震災直後、それまでの規定方針に従い山古志村は長岡市と合併していた。村の議会はなくなった。村独自の予算もなくなった。むらづくりを合議する新しい自治の仕組みは、住民自身がつくるほかない。その人々の

合議の場で、耕す空間の未来についてはどのような「選択」がなされるのであろうか。

終章～がんばらない村

『村史』は、今から30年ほど前の村の“にぎわい”をスケッチして終わる。

肉牛肥育組合を作った若者たちがいる。飼料を購入しないで「あり余る草資源を有効に活用」して牛を飼い始めた人がいる。スズラン、ユリ、シャクヤクの球根やカブを育てる若者がある。シイタケやナメコ、ヒラタケの植付けを試みた「老人クラブの有資格者」がいる。炭焼きを復活させた人がいる。小・中学校の給食野菜を平場から購入しているのはおかしいと、共同栽培を始め、地区内の野菜の自給に成功した主婦たちがいる。宮本常一の提言を受けて^(注20)、村の模型作りを始めた若者たちがいる……。こんな村人たちの活動は、「かけがえのない村」への愛着と、そこで生きる誇りがそのエネルギーになっていると、『村史』は語りかける。

たえず何かを探し求めることは辛く、苦しい。いつも不平・不満が残る。ないものねだりをしない。背伸びをしない。今ここにあるものの価値を認め、それを最大限活かそうと工夫する。ここにはゆしみと、喜びがある。ユートピアは、それを探そうとする限りどこにもない。“トンネル”の向こうにはユートピアはないのだ。しかしユートピアは、今、ここで最善を尽くす限り、今、ここに与えられる。ユートピアは“トンネル”のこちら側にこそ存在する。No-whereからNow-hereへ。

何か特別なものがあるわけではない。ごくあたりまえのものが、ごくあたりまえにある。うまい米、野菜。庭や道筋は花でいっぱい。何でも自分で作って、誰もが物知りだ。客人はいつも優しく迎え入れられる。美しく、温かくて、美味しい。こんな村がユートピアで

なくて、どこにユートピアがあるのだろうか。

「色々なものを作って暮らしていければこんない所はない」。ある村人がそう言った。山古志は“がんばらない”村なのである。

萱峠に登る。標高680メートル。ここは山古志で最高の地点である。震災前、峠に広がるなだらかな斜面は村の共同放牧場だった。しかしここにも地震の被害が及んだ。草地には今も深く、長い亀裂が延び、給餌場は残骸をさらす。南東方向。まるで箱庭のような山古志の村を見下ろす。その遥か向こうには、越後三山（八海山、越後駒ヶ岳、中ノ岳）が望める。そして西方に転ずる。低い山脈（やまなみ）を隔てて眼下に広大な水田地帯が広がる。川筋が白く光る。信濃の流れだ。あのあたりから河口まであと数十キロ。遥か甲武信ヶ岳から始まった長い旅は、まもなく終わる。

【注】

- (1) 新潟平野の干拓の歴史は以下を参考にした。
志村博康編（1992）『水利の風土性と近代化』
東京大学出版会
- (2) 合田新介（1979）思想の科学社
- (3) 千曲市観光協会のホームページ
- (4) 長野県のホームページ
- (5) それ以前、東京と新潟を結ぶ鉄道は「高崎線・信越本線ルート」と「東北本線・磐越西線ルート」の二つがあった。前者は千曲川、後者は阿賀野川に沿う迂回ルートである。
- (6) 中越大地震の被害について、土木工学の専門家の総括はどうなのだろう。
- (7) 筆者は長年、市街地内農地を利用した都市住民による自給農園運動に携わってきた。以下の拙著を参照されたい。
『やば耕作団』（1885）風涛社、『ぼく達は、なぜ街で耕すか』（1990）風涛社、『都市の再生と農の力』（1992）学陽書房、『自給自足12

- か月』（1996）創森社（共著）、『街人たちの楽
農宣言』（1996）コモンズ（共著）
- （8） 拙著（2009）「山古志の農業」（第2報）『福祉
社会開発研究』第2号 参照
 - （9） 農家からのヒアリング（2009年10月）
 - （10） メンバーからのヒアリング（2009年10月）
 - （11） 山古志支所担当者からのヒアリング（2009年
10月）
 - （12） 中島紀一他編（2010）『有機農業の考え方と技術』
コモンズ 参照
 - （13） ヒアリング（2009年10月）
 - （14） ヒアリング（2009年8月）
 - （15） 村史編集委員会編（1985）
 - （16） 旧種芋村、太田村、竹沢村、東竹沢村の合計
 - （17） 反収は1ヘクタール当たり約2.3トンである。
 - （18） 山古志支所調べ
 - （19） 山古志住民会議編（2009）「つなごう山古志の
心 やまこし夢プラン」
 - （20） 山古志村写真制作委員会編（2007）『ふるさと山
古志に生きる－村の財産を生かす宮本常一の提案－』
農文協 参照

